

筆談による日韓のコミュニケーション

文 慶喆*

Communication of Japan and Korea by a conversation
by means of writing

MOON Kyungchol

1. はじめに

朝鮮半島と日本列島はずっと遡ると陸続きの時代があったとされている。地球の地殻変動によって日本と韓国はくつついたり離れたりを幾度も繰り返した後、今のような形になったと考えられる。このような地形的な背景をもとに日本と韓国の交流は一衣帯水で始まったが、歴史的に窺えるのは朝鮮半島の三国時代¹⁾からである。様々な交流が繰り返されてきたが、その様子は次のようなものからその端面を窺い知ることができる。

日本と韓国の交流は旧石器時代まで遡る。日本と韓国で同時に出土している「黒曜石」がその例である。日本列島でも最初は地理的な面から対馬、壱岐、九州北部から次第にその領域が本州へと広がる。しかし、歴史上で本格的な交流が見られるのは朝鮮半島の三国時代からと考えられる。

この三国の中で朝鮮半島の一番北にあった「高句麗」の領域はいまの中国の一部にまで及んでいたと言われている。その証拠の一つが「好太王碑」²⁾である。高句麗の第十九代王「好太王」の業績を称えた碑とされているが、その置かれている場所は、いまの中国吉林省集安市である。約1,800字からなる

* 東北文化学園大学総合政策学部教授

1) 三国時代は朝鮮半島に「高句麗」、「百濟」、「新羅」の古代国家が成立した紀元前1世紀頃から紀元後7世紀までのことを言う。

2) 韓国では「広開土王碑」と知られている。

この碑文の内容の解釈については様々な見解があり、未だに詳細な内容は不明な点も多いが、高句麗、百濟(百残)、新羅に加えて日本(倭)が登場する点では非常に面白い。高句麗の好太王の治績を称える為に立てたが、その内容の中には高句麗、百濟、新羅、日本がどのような立場にあったのかを説明していて、この地域での交流がどのように行われたかを知る貴重な資料になる。その為、それぞれの国の利益関係が絡み、学会では厚い論争が行われた。文の主語の扱いによっては、どちらが主導権を握ったかが分かれるからである。この好太王碑文論争においては碑文の改削説や捏造説まで登場した。しかし、碑文の内容はともかく、この碑文によって当時の東アジアの国を巡る国際情勢や交流の資料としての価値はとても高いことには違わない。

また、日本と韓国の交流を伺う貴重な資料の一つが奈良県天理市の石上神宮³⁾に伝来した鉄剣「七枝刀(ななつさやのたち)」である。この七枝刀の名は、銚に似た主身の左右から三本ずつの枝刃を出して、合わせると七本の刃を持つ形から由来する。日本の国宝に指定されているこの七枝刀の主身には54の文字が刻まれている。この背景には「鉄」との関係がある。朝鮮半島に三国(高句麗、百濟、新羅)が完全に定着する前には、半島南部に「伽耶国」系があった。伽耶国系というのは、一つの統一国家ではなく、幾つかの小国に分かれていたからである。当時日本では鉄の産出ができなかったので、この伽耶の地域が日本の鉄の供給地となっていた。このような鉄と関連するものの証がこの七枝刀である。この鉄を巡って日本と韓国の間で交流が行われたが、高句麗の南下や日本での鉄の産出により交流の規模は次第に縮小していく。

その代わりに、交流の軸が日本の方に移っていくことになる。5世紀中葉頃からは、秦氏(はたうじ)、漢氏(あやうじ)集団の大量の移住に発展する。この集団によって、農業の技術や良質の焼き物の技術を齎すことになる。この勢力の中には、地方の有力者になる人も現れた。また、この時期に朝鮮半島の三国の中で一番弱い立場にあった百濟は日本の大和政権の協力を引き出すため、各種の「博士」⁴⁾を派遣することになる。この百濟の博士によって齎

3) 奈良県天理市布留町にある日本最古の神社の一つである。

4) 百濟では学校教育において今の教授の職位として「詩」、「書」、「易」、「礼記」、「春秋」の五経博士と専門博士制度があったとされている。またこの博士制度は高句麗、新羅にもそれぞれあった。

した文化は、飛鳥文化形成の原動力となる。また、高句麗の僧侶「慧慈」が来日し、飛鳥寺を中心に聖徳太子との交流は有名な話しである。高句麗僧「曇徴」は紙の製造法や墨を日本に齎した。この時期を起点に漢字使用の拡大である。日本に何時頃漢字が入ったかとのルーツで入ったかは諸説があるが、少なくとも僧侶や博士らによって齎した書籍⁵⁾や紙と墨によってその底辺が広がることになる。これによって日本と韓国の漢字の共用に繋がり、後に他の言語話者には見られない「筆談法」という独特なコミュニケーションの手段が生まれるようになる。

7世紀になると、朝鮮半島は三国間の主導権争いが本格化し、その中で弱小国だった新羅が唐と連合し百済に攻めてくる。百済は日本に援軍を求め、500隻の船団が派遣されたのが「白村江の戦い」⁶⁾である。白村江の戦いで負け、百済が亡びた後、大量の流民が日本に渡ってくる。代表的な人物が高麗王と知られる「若光」である。従来の渡来人は九州や近畿に集中していたが、若光⁷⁾は関東の方に移住した。その後、一時的に交流の低迷期もあったが、交流が再開され日本から新羅に20回、新羅から日本に17回使節の往来があった⁸⁾。779年新羅との国交が断絶されてからも一般の商人による貿易は活発に行われた。その時の証が「東大寺正倉院」に多数保管されているものである。この物の中には新羅の物だけでなく、中継貿易によって香料や薬品等の西域の物も多く含まれている。また、高句麗との関係の深い渤海とも交流が行われ、日本から渤海13回、渤海から日本に34回使節の往来があり、政治的な関係より経済的な関係が重視された。

このような関係が朝鮮半島に「高麗」の建国によって日韓交流の氷河期を迎える。勿論、高麗から920年国交回復を要請して以来、事ある度に好意を示し要求したが日本に断られた。これに追い打ちをかけたのが元寇の侵略⁹⁾

5) 百済の王仁博士によって『論語』、『千字文』等の書籍が齎された。『古事記』には王仁博士を「和邇吉師(わにきし)」と記す。

6) 663年(天智天皇二年)白村江(今の韓国の錦江河口付近)での、日本・百済連合軍と唐・新羅連合軍との戦い。

7) 現在の埼玉県日高市にある高麗神社と関係する。高麗神社は「若光」を主神とし、「猿田彦命」と「武内宿禰命」も祭っている。

8) 外交的には779年新羅との国交が断絶される。

9) 当時中国を統一したモンゴル帝国はその属国である高麗も連れて二度にわたり日本侵攻を行う。一度目を文永の役(1274年)、二度目を弘安の役(1281年)という。一般には蒙古襲来ともいう。

である。当時、元の支配下にあった高麗は1274年と1281年の二回にわたって兵士や戦艦、食糧等を分担し、日本遠征に元軍と参戦した。これによって政治的な交流は勿論交易まで断たれ、それに依存していた九州や瀬戸内海の領主や住民が大きな打撃を受け倭寇が発生することになる。この倭寇は日韓間の深刻な外交問題となり、1404年朝鮮と室町幕府間で国交樹立にこぎ着ける。これによって両国の善隣外交が再開し、経済・文化面での交流がより活発に進められた。1443年(日本・嘉吉3年、朝鮮・世宗25年)に結ばれた「嘉吉条約」(朝鮮では「癸亥条約」¹⁰⁾により、15世紀、16世紀頃までの150年間において、多い時には年間200隻を超える貿易船が両国を往来したと記されている。このような良い交流の中で、豊臣秀吉による「文禄・慶長の役」¹¹⁾によって一時中断されることになる。しかし、その後の国交回復は異常の速さで行われた。両国共に不幸とも言えるこの戦乱によって、大量の人的交流と焼き物を始めとする技術の伝来も齎した。江戸幕府は朝鮮との国交回復を迅速に図り、1607年に国交回復と1609年には「日朝通商条約」¹²⁾を結んだ。これによって、1607年から始まった朝鮮通信使¹³⁾は1811年まで十二回にも及んだ。鎖国政策をとっていた日本における朝鮮通信使の来日は、徳川幕府の国際的な地位を示す絶好の機会であり、江戸に至る各地域の大名は勿論、一般庶民からも大々的な歓迎を受けた。300人から500人規模の訪問団は、長い日程の中で沿道の人々や宿泊地での交流が自然に行われた。最初の到着地である対馬では約一か月位滞在するなど、主な宿泊地では長く滞在することもあった。宿泊地では専用の宿泊施設があったが、通信使一行の人数が多いため一部は近隣の寺や一般の家で民宿することもあった。このような場で自然に交流が行われ、取り入れたコミュニケーションの手段が漢字による筆談法だった。

10) この条約の内容は、①宗氏から毎年朝鮮に派遣する歳遣船の数を50に限定する②宗氏から朝鮮に対して緊急に報告しなければならないことがおきたときは、歳遣船の定数外に特遣船を派遣することができる③朝鮮から毎年宗氏に送る歳賜米・豆はあわせて200石に限定するという三点であった。

11) 韓国では「壬辰倭乱」、「丁酉再乱」と言い、文禄1(1592)年(朝鮮の宣祖25年)と慶長2(1597)年(朝鮮の宣祖31年)の2度にわたる朝鮮出兵で中国の明まで巻き込む戦争に拡大し、7年間にも及んだ。

12) 慶長14年(1609年)、対馬の宗氏と朝鮮の間で結ばれた条約で、己酉約条ともいう。

13) 第一回の1607年、第二回の1617年、第三回の1624年の三回は「回答使兼刷還使」といい、正式な朝鮮通信使は1636年第四回から1811年第十二回までをいう。

会話はその資料が残らないが、筆談は自然に資料が残るため、朝鮮通信使が通った沿線を中心にその時行われた筆談の資料が大量に残っている。また、朝鮮半島にも倭館¹⁴⁾が設置され、十万坪の領地に400人から500人の官吏や商人が常時居住していた。日本からは東南アジアからの貿易品や銀、銅の鉱産物が主流で、朝鮮からは米、綿、高麗人参などの農産物が主流だった。

このような平和的で友好的な日韓交流が長い間続かれ、政治、経済、文化の面において大きく貢献したが、江戸末期になると日本の関心は朝鮮半島から欧米に向けられる。このような雰囲気の中でも横井小楠¹⁵⁾や勝海舟¹⁶⁾のように、朝鮮との連携によって欧米に対抗すべきだと主張する知識人も現れた。しかし、このような主張は受け入れられず、また朝鮮側も19世紀以降鎖国政策を固執した。その後、日韓関係は江華島条約¹⁷⁾から日本支配時代を経て、1965年の「日韓基本条約」で国交を回復、現在に至る。長い歴史の間、何回かの国交断絶の危機もあったが、一般的には友好的で互いに有益な交流の期間が長かった。

また、このような国家間の交流とは別に、自然が齎した交流の機会もあった。季節風による漂流民である。特に日本海を巡っての交流のきっかけであったが、その為には江戸時代における「海禁」政策を理解しなければならない。当時朝鮮も同様で、日本と中国との交流は許可制をとっていたが、海を巡っての海禁は重要な仕事¹⁸⁾であった。その中で、季節風や海潮流によって日本海側に漂流船や漂流民が大量発生するである。記録に残っているだけでも、1599年から1872年までの間朝鮮から日本に漂着した事件だけで約1000件、日本から朝鮮に漂着した事件が約100件に上った。漂流民の数も両方を合わせると一万人を遥かに超えていた。朝鮮人と日本人の漂流民の比率は1:10で朝鮮人の方が多かった。この漂流民との出会いは大きな問題であり、一般の人からすると大きな心配の種でもあった。荒野泰典(1988)によると、古代・中世においては漂着船や漂流民は基本的に「遭難物占取権」が成立し、沿岸住

14) 朝鮮との外交実務と貿易を担当していた対馬藩が設置し、最初は釜山の豆毛浦に、1678年から釜山の草梁にあった。最大の時は3000人程の日本人が滞在したとも言われる。

15) 幕末維新期の熊本藩士、儒学者、政治家・思想家。(1809～1869)

16) 江戸時代末期から明治時代初期の武士、政治家。(1823～1899)

17) 1876年(明治9年、高宗13年)に日本と朝鮮との間で締結された条約とそれに付随した諸協定を含めて指す。正式な名前は「日朝修好条規」だが、江華島で締結されたため「江華島条約」ともいう。

18) 一般人と倭寇との区別が重要な仕事。

民に帰属されたとのことである。しかし、15世紀になると友好関係と貿易の為に漂流民送還体制が整備された。それによって送還することになるが、日本の外交資料である『通航一覽』¹⁹⁾に1640年(寛永十七年)「異国船何国の浦に漂着すとも、長崎に護送あるべき旨令せらる」との記事が掲載されている。送還ルートについては、朝鮮人が日本に漂着した場合、漂着地から長崎に送られ、また対馬府中に行き、釜山の倭館を通じて地元に戻された。日本人が朝鮮に漂着した場合は、釜山の倭館から対馬府中へ送られ、対馬府中からは長崎奉行所か大阪奉行所に行き、そこで地元の大名か幕府代官によって地元に戻された。このような一連の過程で取り入れたコミュニケーションの方法が筆談法であり、日本にはその筆談の資料が多数残っている。昔から日本と韓国の間では、コミュニケーションの手段としてこの漢字による「筆談法」が様々なところで使われたのである。

2. 筆談によるコミュニケーション

2-1. 筆談法とは

普通のコミュニケーションは会話による方法が一般的である。しかし、この前提は両方が共通の言語を持っているときに限る。異なる言語話者同士がコミュニケーションを取る場合は、身振り手振り²⁰⁾などの手段が取られていたりするが、これでは正確で高度なコミュニケーションは不可能である。お互いに相手の言語でコミュニケーションが取れなく、共通言語がない場合には、この間に通訳が入ることになる。通訳という第三者が入ることによって、直接的な対話でなく三者方式になる弱点が生じることもある。通訳者の質の問題もあるが、通訳者の介入によって時間がかかったり、意思がストレートで伝わらなかったりすることもある。そのため、ここで登場するのが「筆談法」である。この前提は、お互いに話し言葉は違っても共通の文字理解が必要になる。

筆談法は元々中国で生まれたという。中国の歴史は変化を繰り返しながら

19) 江戸幕府の命により大学頭林復斎らにより編集された日本の歴史書(外交史料集)。

20) 意思の疎通を図るために、言葉ではなく体全体や手の動作で意志や感情を表現することを意味する。

多民族²¹⁾、多言語社会に移行していく。また、中国語²²⁾と言っても方言の差は他の外国語に匹敵するほど異なる場合もあるという。中国で漢字の発明以来、広がりや定着によって生まれたのが漢字による筆談法であった。この筆談法は、中国のみならず周辺国への漢字の広がり共に、同じ漢字文化圏の韓国、日本、ベトナムに広がり、普通のコミュニケーションの手段と発展したのである。言葉と文字は、機能的な面においては補完的な関係にあるが、コミュニケーションの方法としては差別的である。言葉は一般的に平等的なコミュニケーションの手段であるのに対して、文字はある程度の文化的産物である。そのため、文字はそれを作りだした文化的特徴と精神的思想を内包している。一般的にはどの言語においても話し言葉が先で、文字はその次に導入される。話し言葉をどのように文字で表すかが大きな課題ではある。このような文字の弱点に対して、文字は視覚性に優れ、また中国のように方言の差が激しい所では共通性や標準性が担保される。勿論話し言葉が万人共通に対して、文字言葉は一部の知識層に限ることもある。この知識層に限定すれば、漢字は日本、韓国、ベトナムなどの間において有効なコミュニケーションの手段であつたことは言うまでもない。

当時の筆談がどのように行われ、どのような内容だったのかを日韓交流の歴史の中で重要な位置を占めている「朝鮮通信使」や「漂流事件」などから探ってみることにする。

2-2. 「江関筆談」の例

異言語間のコミュニケーションにおいて、一般的に取り入れている方法が通訳法である。朝鮮通信使においても、朝鮮には通訳を養成する教育機関があり、官吏登用の試験においても「訳官」²³⁾という分野が別にあった。日本語訳官養成のための教科書として、朝鮮で出版された『捷解新語』²⁴⁾という書物はとても有名である。日本においても主に対馬藩を中心に韓国語通訳の養成²⁵⁾

21) 現在の中国は漢族以外に55の少数民族が共存する。

22) ここでの中国語は「普通話」すなわち標準語である。

23) 朝鮮の科挙試験には文科、武科に加え、雑科に通訳分野の「訳官」が含まれていた。

24) 『捷解新語』には読み方をハングルでふっているので同時の日本語の口語の資料として重要である。

25) その中心的人物は、「雨森芳洲」である。江戸時代中期の儒者。(1668 - 1755)

が行われていた。しかし、訳官は全体の一行の最大6人で、殆どが公式行事でだけであった。そのやり取りも毎回同じで殆ど変わらなかった。

一般的に通訳法には同時通訳と順次通訳がある。その同時の通訳法は今と随分違っていた。その流れは、以下のようなものである。

- 朝鮮の三使の発言を朝鮮の通訳に伝える →
- 朝鮮の訳官はそれを対馬島主に伝える →
- それを対馬藩島主は、日本の官吏に伝える

また、日本側の発言はこの逆順で、対馬藩の訳官は朝鮮の通訳に伝え、それを朝鮮の三使に伝える、とても複雑な通訳法だった。時間も要するし、通訳の過程でそれぞれの利害関係が絡み、真義が伝わらないトラブルも生じた。また、朝鮮通信使の一行は500人規模に対して、通訳人は5～6人に過ぎなかった。【表1】は1607年朝鮮通信使の随行員の名称と人員を表したものであり、この年の訳官は6人だった。この訳官はおそらく公式の場において通訳を担当したと考えられが、この人数で公式な行事だけでなく、私的な交流にまで通訳をすることはできなかった。

【表】1607年朝鮮通信使の随行員の名称と人員

上使(1)	副使(1)	従事官(1)	訳官(6)	医官(2)
学官(1)	書員(1)	書写員(1)	京砲手(4)	
東菜小通事(4)	吹笛(1)	軍官(14)	子弟(5)	
小童(4)	吹手(12)	都訓導(2)	羅將(4)	
船員(18)	格軍(380)	奴子(5)		

そのため、私的な交流だけでなく、公的な交流においても漢字による筆談法が重要なコミュニケーションの方法だった。筆談は礼儀を重んずる両国の人にとって都合の良い手段であった。元々漢字は中国で作られたがその後朝鮮半島や日本に同時に伝わり、それぞれの話し言葉は違っても、共通の文字によって筆談が可能になる。特に、徳川幕府は学問や思想の中心に儒学を置

いており、朝鮮通信使の随員は優秀な儒学者だったため、日本から積極的に交流を求められた。その中でも代表的なのが「江関筆談」である。

「江関筆談」は、「家宣襲封祝賀」の目的で来日した第八回目の正使「趙泰億」²⁶⁾と日本側の接待の代表であった「新井白石」²⁷⁾間の筆談による討論である。1711年朝鮮通信使の本陣の宿舎であった浅草東本願寺において11月5日、11月6日の二回にわたり行われた。

○11月5日 新井白石と趙泰億の「江関筆談」(一回目)

○11月6日 新井白石と趙泰億の「江関筆談」(二回目)

江関筆談は、朝鮮の代表である趙泰億と日本の代表である新井白石の間で行われた筆談によるバトルで、問答形式だった。この筆談は後に日本と朝鮮で同じ名前の『江関筆談』として刊行されることになる。朝鮮本は、任守幹²⁸⁾『東槎日記』の中に収録され、日本の方は『新井白石全集』に伝わる。任守幹はこの「江関筆談」に序文を付け、その経緯を説明している。1712年中春日本から帰国の道に着いたときに下関で強風に会い乗船できず宿舎の風本館で暇を潰していた時にこれを整理したと書いてある。趙泰億が整理したとされる白石本には、この序文がなく「通政大夫吏曹参議知製教趙泰億輯」という署名だけ入っている。この二つの異本を比較してみると欠けている部分があり、二つを合わせて筆談の全体像が見えてくる。その詳細は、次のようになる。

1. 新井白石が朝鮮通信使を表敬訪問する。(任守幹本と趙泰億本)
2. 趙泰億が筆談を提案する。(任守幹本と趙泰億本)
3. 白石が朝鮮正使と煙草を吸わない理由を問答する。(任守幹本と白石の座間筆談)

26) 朝鮮王朝の官僚。1711年朝鮮通信使の正使として来日。国書での將軍の称号を「日本国王」とあらため、応接儀礼の簡素化をはかる新井白石の要求を受け入れたとして、帰国後処罰を受けた。(1675 - 1728)

27) 江戸時代中期の旗本・政治家・朱子学者。一介の無役の旗本でありながら六代將軍・徳川家宣の侍講として御側御用人・間部詮房とともに幕政を実質的に主導し、正徳の治と呼ばれる一時代をもたらす一翼を担った。(1657 - 1725)

28) 任守幹は1711年通信使の副使だった。

4. 配席した朝鮮従事官、副使と白石が中国古書の保管について論ずる。(任守幹本と趙泰億本)
5. 中国古書を見せられない理由について問答する。(任守幹本)
6. 白石が中国の例をあげて中国古書を見せられない理由を強調する。(趙泰億本)
7. 白石が西洋各国の使節に会ったことを自慢する。(任守幹本と趙泰億本)
8. 万国地図を見せ、西洋の国の位置について問答する。(任守幹本と趙泰億本)
9. 白石が万国地図を説明する。(任守幹本)
10. 白石と朝鮮副使と中国や琉球との往来について問答する。(任守幹本と趙泰億本)
11. 白石に朝鮮副使がイタリアのマテオ・リッチについて聞く。(任守幹本と趙泰億本)
12. 白石に朝鮮従事官が琉球の服飾制度と文字使用について聞く。(任守幹本と趙泰億本)
13. 白石が朝鮮の服飾制度について聞く。(任守幹本と趙泰億本)
14. 白石に朝鮮の副使から日本の武芸を頼んだことを例に挙げ、善隣について論ずる。(任守幹本と趙泰億本)
15. 白石が日本の言葉と文字について論ずる。(任守幹本と趙泰億本)
16. 趙泰億が白石に日本の国書を正書する前に見せてくれることを要請する。(任守幹本と趙泰億本)
17. 白石に日本の冠婚葬祭に中国の朱子家礼に従うのかを聞く。(任守幹本と趙泰億本)
18. 白石が再び趙泰億に煙草を勧めながら、互いの名号について冗談交じりの問答を交換する。(趙泰億本)
19. この席に朝鮮の製述官と三名の書記が入る。(任守幹本と趙泰億本)
20. 引き続き冗談話をする。(趙泰億本)
21. 白石が朝鮮の製述官と書記に年齢と官職を聞く。(任守幹本と趙泰億本)
22. 白石が配席した鄭書記が鄭夢周の子孫であることを知り、鄭夢周について談話する。(趙泰億本)
23. この席に雨森芳洲が入り、雨森芳洲に話題が移る。(趙泰億本)
24. 配席した朝鮮書記の自己紹介が続く。(任守幹本)

25. この筆談会の別れを惜しみ、白石はこの筆談を後日送ってくれるよう頼む。(任守幹本と趙泰億本)

この任守幹本と趙泰億本を比較してみると、任守幹本は事実を充実に伝えようとする半面、趙泰億本は新井白石に重点を置き、丁寧な表現で記している。この筆談によって日韓の外交戦略や世界認識が伺える。

2-3. 「藤原惺窩・姜沆筆談」の例

姜沆は、韓国全羅道にある靈光郡で生まれた。代々儒学者の家柄で、名門の家系であった。朝鮮宣祖21年(1588年)「進士」という官吏に登用され、1593年には文科に登り、工曹佐郎、刑曹佐郎となる。1597年、慶長の役の時、南原城において軍糧調達の任務を担っていた。南原城が陥落してからは義勇軍に召集されたが、ついに藤堂高虎軍に逮捕される。その後日本に送られ、伊予大洲、大阪、伏見などに軟禁される身となる。しかし、1600年帰国が許され、帰国の為の船の調達などに努めたのが藤原惺窩²⁹⁾とその理解者達である。藤原惺窩が姜沆に初めて会ったのが慶長三年(1598-1599)の秋、京都の伏見であった。藤原惺窩は朱子学の再興に尽力していて、朝鮮の朱子学の大家である姜沆の影響を受けた。『朱子訓蒙』を書き写し、『訓解四書五経』を出版した。時には捕虜生活を送っている姜沆を励まし、憂鬱感のとらわれないよう忠告した。この筆談の自作本には、それを快く受け入れたことが記され、両者の情誼は互いに深い信頼の上であったことが分かる。

2-4. 「筆談唱和」の例

筆談唱和のなかでも、日本の一番の関心事は医学情報だった。そのため、朝鮮通信使の構成員に必ず医師を入れるよう強く要望していた。これが医官で、この問答は漢字による筆談で行われた。医事問答が本格的に行われるのは1711年第八回目の通信使の時である、この時同伴したのが良医「奇斗文」だった。『鷄林唱和集』は日本の竹田定直と良医奇斗文が藍島で行った医事問

29) 戦国時代から江戸時代前期にかけての儒学者。家名の冷泉を名乗らず、中国式に本姓の藤原および藤を公称した。(1561～1619)

答をまとめ、京都京師書坊の松柏堂と圭文館で出版されたものである。『兩東唱和後録』は、良医奇斗文と村上溪南³⁰⁾が、江戸からの帰りに泊まった京都において行われた医事問答を中心に書かれたもので、針灸の話題が中心であった。そのため、奇斗文は鍼術の専門書である『医学入門』、『神応興』などを前もって用意し、見せながら説明した。村上溪南は「別穴」について特に関心を示し、それを筆写した。1711年12月1日に復路で大垣³¹⁾に着いた奇斗文の宿舎は全昌寺だった。そこで待っていたのは、北尾春圃だった。北尾春圃は一人ではなく、春竹、春倫、道仙の三人の息子まで同伴していた。待ちに待った機会だったので、12月1日の夜から三日間にわたって行われた。『桑漢医談』は医学に関する初めての筆談唱和集であった。ここに同席していた北尾春倫が序文、本論、跋文、付録にまとめ、京都で出版された。北尾春圃は朝鮮人參について強い関心を示し、その栽培法や効能について執拗に質問した。「沙參」を持ち込み、これを朝鮮人參の代用にできないかを聞くが、奇斗文はそれを囁んでまでしたが、その答えは否定的だった。これをきっかけに朝鮮通信使の良医と北尾家は三代にわたって交流を続けることになる。また、30歳代の男性の難病についても相談をした。『桑漢医談』は日本の医学界に刺激を与え、医事問答を盛り上げることになる。

この医事問答による筆談唱和集は、『桑漢医談』の他に『兩東唱和後録』(1711年、良医奇斗文と梯靖庵、村上溪南)、『鷄林唱和集』(1711年、良医奇斗文、李東郭と稲生若水、竹田定直)、『桑韓墳簾集』(1711年、良医権道、医員金光泗と北尾春倫、飯田玄机、飯田隆慶、林義方)、

『韓客筆譚』(1748年、趙崇寿と橘元勲)、『仙槎筆談』(1748年、朴敬行と橘元勲)など18の書物が刊行されている。

2-5. 「洪啓禧³²⁾と中村深蔵」の例

この時代において筆談紙は、各地で高い人気があった。朝鮮通信使に会えるのが社会的なステータスと考える傾向まであった。朝鮮通信使が泊まると

30) 村上溪南は鍼灸を業とする家柄だった。

31) 岐阜県大垣市。大垣市は古くから東西交通の要衝として知られ、また朝鮮通信使が通る朝鮮人街道の中心に位置している。

32) 1748年朝鮮通信使の正使を務め、来日した。(1703～1771)

ころでは筆談を求めて、また筆談紙や書を手に入れようと行列ができる程だった。一種の記念になるもので、大事に飾っておく家も多かった。1748年朝鮮通信使の正使は洪啓禧だった。当時当時朝鮮通信使の三使と面談できるのは、大学頭である林家父子に限られた。そこに中村深蔵が入ることを要請した。勿論、この慣習によって断れた。しかし、中村深蔵は再三の面会を要請する。中村深蔵は江戸出身の儒学者である。父は幕府医官の中村玄悦で、父から医学を学んだ。しかし、1747年西の丸奥医から奥儒者に転じ、名前を深蔵と改めた人である。再三の要請に感心してこれを許す。中村深蔵は、朝鮮通信使と筆談で朱子学の議論に加わる。筆談が終わる頃、中村深蔵は三使に丁寧に頼む。

「請以三使筆談之紙 帰作家宝 許之」；筆談の紙を三使に願う。この筆談の紙を貰えたら家に持ち帰り家宝にしたい。三使はこれを許した。

このように、当時の筆談に対する価値がどんなに高かったのかが垣間見られる。特に、製述官は日本全国から集まる学者を相手に毎日昼も夜も大忙しだった。

2-6. 「安田義方の『朝鮮漂流日記』³³⁾」

朝鮮から日本に季節風などによって沢山漂流民が発生する中で、その数は少ないものの日本から朝鮮半島の方に漂流する場合もあった。その代表的な例が「安田義方」である。安田義方は離島である沖永良部島の代官勤務を帰り途だった。1819年6月14日、永良部島を出た船は25人の仲間と共に漂流することになる。7月3日には朝鮮半島に漂着した。そこで出会ったのが、朝鮮の庇仁県監「尹永圭」である。この尹永圭という人物は好感を持てる人物だったらしい。その描写には、端正ではっきりとした瞳、ふっくらとした頬、穏やかで慎み深く、ゆったりとして厳かな香り漂う人物と記されている。尹永圭は筆談で、安田義方と対話を始める。最初の質問は当たり前だが、あな

33) 日記の著者は、代官付の安田喜藤太である。

たがたはどこの国の人で、どうしてここに漂着したかを聞く。なぜなら、そこはあまり外国との接触が少ない所だったからである。しかし、対応は一般的な事務的処理でなく、怪我人がいないとか船の停泊地を穏やかな浜辺にするなど様子は他と違っていた。安田義方は朝鮮の官吏と接触する際は、家童の次郎(当時十三歳だった)に刀を持たせ随行させていた。尹永圭はその充実した態度に心を打たれ、関心を示すようになる。その名前を紙に書かせ、その日本読みを聞いたりした。尹永圭は船を訪ねたりするときに「じろう」と呼んでいた。安田義方は、太守から一人一升基準で毎日三食支給すると言われたが、これを断った。船にはまだ米があり、船内の米を食べ尽してから頼むと言った。しかし、尹永圭は「国朝交隣盛徳美義(日本と朝鮮の交隣のための優れて立派な徳を行うことは美しき規範である)」と答えた。安田義方は、朝鮮の地方官僚らと漢文の筆談によって、現地での待遇と送還について折衝を行いながら、一方で、酒を酌み交わし、詩文を贈り合い、交流を深めていく。尹永圭は文化に対しても自分達の優越性だけを主張せず、それぞれを尊重し、相互理解を深める考えだった。7月26日漂着地を離れることになるが、別れ際に帰還後の処遇について聞く。こんな事態になったので、ご褒美か処罰かのいずれかになるだろうと答えた。三人の朝鮮官吏はきっと褒賞されるべきと述べ、夜中にも天に向かって千回も万回も褒賞を願うと言った。

この交流は、朝鮮通信使のような国レベルの公の交流ではなく、一般の庶民との交流という意味合いはとても重要である。

2-7. 「朝鮮からの漂流民」

季節風によって朝鮮半島から日本海に漂着する船や漂着民は古くから度々あり、その規模は想像を超えるものであった。但し、漂着地が辺鄙な海岸や離島などに散らばり、記録として伝わるのはその僅かであることは容易に想像できる。その一部を見ると、次のような例がある。1777年(安政六年)、島根県の西村(隠岐)に13名の漂流民があった。後に調べた結果韓国の東海岸にある「江原道」から来たことが分かった。この江原道からはその後1820年(文政三年)にも島前西ノ浦の国浦海岸にも11人が漂着した。このような漂流民は北陸から新潟、山形、秋田、北海道まで日本海の広範囲に及んだ。漂着民は地元の官吏によって取り調べを受け、送還の手続きに入る。ある例で

は地元では処理できず、長崎への送りを希望するが40日経っても返事がなく困っていたという記録もある。この漂流民への取り調べは、基本的には漢字による筆談に頼るしかなかったが、その中には漢字の理解ができず³⁴⁾困難を極めたときもあった。その為、頻繁に来る漂着民の処理に困り、身振り手振りで漂着民に聞き、韓国語の教本を作ろうとする努力もあった。このように漂着民を巡ってもコミュニケーションの手段として筆談法を使ったが、朝鮮通信使の例とは違い、この筆談法は限界があったことは言うまでもない。

3. 終わりに

1.で述べたように、日本と韓国の間では様々な交流が長きにわたって行われてきた。この交流において、両国は話し言葉が異なるため、そのコミュニケーションの為には様々な工夫が必要だった。

また、日本と韓国の間には外交上の問題を解決するため、お互いに通訳官を養成する教育を行い、その中には優れた通訳もいた。しかし、広範囲にわたり、様々な形の交流を行うためには、通訳にだけ頼るコミュニケーションには限界があったと考えられる。その中で、日本と韓国の交流にあたってはこの筆談法がとても有効なコミュニケーションの手段であることが実証された。

韓国の方では、この筆談法の歴史が長く、すでに実証済みだった。韓国は中国との交流において、この筆談法を使った明や清との朝鮮燕行使の「北京筆談録」の記録が膨大に残っている。その後、日本との交流においても筆談法は積極的に使われた。

この筆談法は、直接会話によるコミュニケーションと比べ、その効果が劣るように見えるが、実際にはそうでもなかったようである。朝鮮通信使の例を見ても、筆談でユーモアを交えた裁きはとても巧みで、余裕があり、品格があった。話し言葉より寧ろ視覚的特徴からその効果を極大化する面もあった。勿論、この筆談法に加わる話者の教養や知的水準の高さからくることもある。優れた筆談法の中で、その代表的なのが『江関筆談』であり、筆談がとても盛り上がり、筆談の紙は一日数十、数百枚に上ったと記されている。

34) 当時朝鮮は身分社会で、漢字が自由に使えるのは知識層に限られていた。

また、口語の話し言葉が自然の産物だとすれば、文字は文化的産物である。文字によって視覚的効果だけでなく、精神的思惟の輪が広がる。話し言葉は一瞬に行われるので理解に苦しむことも、文字ならじっくり観て理解することができる。

筆談は記録としても重要性を持つ。話し言葉は記録としては保存されにくい、筆談はそれ自体が記録になる。12回の朝鮮通信使は、その後膨大な記録を残し、書物が刊行されている。また日本においても通信使一行と交わした筆談を基に、それを整理して出した『筆談唱和集』が膨大にある。漢詩、医学、外交、観相、風習、歴史意識など多様な分野に及ぶ内容の共有は、両国の発展に大いに貢献したと考えられる。

この筆談法は朝鮮通信使のような上級な場面だけでなく、日本海などを挟んでの漂流民をめぐるでも有効なコミュニケーションの手段であったことが分かった。

この筆談法は、日韓交流のコミュニケーションの精神としてこれからも引き継がれるべきであると考えられる。

参考文献

- 『江戸時代の朝鮮通信使』李 進熙 1992 講談社
『海遊録』申 維翰(姜在彦訳) 1974 平凡社
『近世日本人は朝鮮をどうみていたか』倉知 克直 2001 角川書店
『近世日本と朝鮮漂流民』池内 敏 1999 臨川書店
『国史大辞典』11 国史大辞典編集委員会編 1990 吉川弘文館
『国史大辞典』13 国史大辞典編集委員会編 1992 吉川弘文館
『古代朝鮮』2004 講談社〈講談社学術文庫〉
『朝鮮通信使と日本人』李 元植他 1992 学生社
『朝鮮通信使－人の往来、文化の交流』辛 基秀 1993 明石書店
『朝鮮通信使に奇跡－増補・前近代の日本と朝鮮』中尾 宏 1993 明石書店
『朝鮮通信使－江戸日本の誠心外交』中尾 宏 2007 岩波新書
『朝鮮の歴史 先史から現代』田中俊明編 2008 昭和堂
『日東壯遊歌』金 仁謙(高島淑郎訳) 1999 平凡社
『漂流記録と漂流体験』倉知 克直 2005 思文閣出版
『日東壯遊歌』金 仁謙(高島淑郎訳) 1999 平凡社
『李朝の通信使－江戸時代の日本と朝鮮』李 進熙 1986 講談社
『わが町にきた朝鮮通信使 I』辛 基秀 1999 明石書店